

式辞（庄原キャンパス 2013）

卒業生・修了生の皆様、おめでとうございます。ご家族と関係者の皆様方、お祝い申し上げます。

ご来賓の方々におかれましては、ご多忙のなか、本学の式典にわざわざご光臨賜り感謝いたしております。そして、この場をお借りしまして、本学関係者とともに、いつも変わらぬご支援に厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

< 卒業生・修了生の皆さま、お座りください。 >

卒業生の皆さまは、この庄原で、本学の生命環境学部の生命科学科、環境科学科、大学院生命システム科学専攻を学ばれ、ご卒業になられます。これは本当におめでたいことでもあります。非常に幸運なことでもあります。

それは、第1に、庄原という地は、人々が努力を積み上げて、美しい郷里と産物を作り上げ、その努力により文化も高く、ここで生活をするこの土地の力が人を育てるからですし、庄原の土地の力は今後も皆さまを支援するはずだからなのです。

さて、庄原のすごさを、比婆牛にかかわらせてお話ししましょう。

本学の教員の中にも比婆牛を知らない方がおられるようになってきたのには驚きますが、私が8年前に京都から広島に来るときに、京都の大学で同じときに副学長をした友人が、庄原の「吾妻蔓」つまり吾妻という優れた牛の系統について、それが江戸・明治時代の庄原近隣の農家の主とその娘さんの努力によって作られてきたことを明らかにした論文をくださいまして、赤岡先生、あのあたりの農家の方の研究心はすごいのですよと教えてくださいました。その研究心、改良努力が実って、1990年ごろまでは、庄原の和牛は、全国的に群を抜いていました。江戸末期には、岩倉牛が育成され、それが比婆牛の育成になり、1953年の全国和牛共進会で最高位となった深川21号を造りあげたのです。詳細は省略しますが、1988年農林水産祭で、比婆和牛育種組合が畜産部門の天皇杯を受賞しています。受賞理由は、全国和牛能力共進会で、連続2年比婆牛が内閣総理大臣賞をとったことですが、評価の要は、計画的・組織的育種改良と子牛生産の低コスト化でした。

旺盛な研究はこれだけではありません。国の無形重要文化財に指定されている大山牛供養田植えに行き、また文書を調べますと、代掻きで牛が歩く道筋を、鶯の谷渡りの型だとか、名前をつけ、ノートに図を描き、伝承しているのです。庄原以外でも日本の農業は厚いノウハウの上になりたっていますが、庄原一帯の農家の研究心はとりわけ強いように私には感じられます。たとえば、二宮尊徳は少年のころ伯父に「百姓に学問はいらぬ」と叱責されていますが、庄原一帯の人々は、学問が大事なことはよく分かっていたと思います。

だからこそ、明治18年1885年三次中学校ができる前に、庄原に庄原英学校ができ、英語、数学、漢学等を教えたのです。しかも、1887年には生徒数94名だったと言いますから当時の庄原の人口4,000人と比べますと、なんと40人に1人がこういう学問を学んでいたということになります。それほど、学問が大事にされ、熱心に研究がなされる土地なのです。なぜ、学問が大事にされたかといえば、その有用性が分かっていたからですが、加えて、庄原など備北一帯は明治に中期に全国の鉄のなんと48%をたたら製

鉄で生産していたことがあげられます。たたら製鉄を盛んに行うには、数学ないし高等算術、それに今でいう経営学・管理論が必要であったからです。

このように学問の大事さが分かっていた土地なので、世界的文学者倉田百三氏がでたのです。また、日米両国でご活躍の大竹美喜氏はアメリカンファミリー生命保険（AFLAC）の創業者で現在最高顧問、アメリカ・ジョージア州の名誉市民で、多くの全国的な重要な役職にお就きですが、現在、教育再生実行会議の有識者委員という大変重要な役割を担っておられるのですが、その大竹氏は庄原のご出身です。

皆さまはこのような庄原で学ばれたのです。

皆さまにとって幸せなことの第2は、皆さまは、研究力の高い大学でレベルの高い高等教育をうけられたことです。大学の研究力を示すよい指標とされるもののひとつに科学研究費補助金の採択件数があります。これは科研と略称されますが、この採択件数を大学間で比較しますと、中四国九州沖縄の全部で25の公立大学のなかで本学は最近5年連続トップなのです。国立大学は、本学と比べて規模が圧倒的に大きく、東大・京大・九大など旧帝国や広大、神戸大などそれに並ぶ大学は、我々の7倍から10数倍の巨大規模で、そのままでは比較は意味を持ちませんから、各大学が年間につかう総費用で割って総経費用1億円当たりの科研費採択件数を計算してみますと、平成24年度4月の公表のものでは、東大と九大が1.67で本学の1.63あまり差がありません。国立の総合大学は中国地方で5校、四国で4校ありますが、そのなかで一番高いのは広大で1.56で一番低いのは0.75となっています。もちろん、国立総合大学の研究と公立大学の研究には非常に大きな違いがありますから、この数字での比較を重視しすぎるのはどうかと、私自身考えますが、しかし、大学を運営するのに使っているお金で科研採択件数を比較しますと、本学は全国で一流の大学ということになります。

この研究力の高い大学で皆様は教育をうけられたのです。しかも、近年では多くの大学で卒業論文を書かなくても卒業認定していますが、本学では、全学生が卒論を書いて卒業します。卒論では、科学研究の正しい方法にもとづいて、課題を学生がみつけ、文献渉猟し、論証か実証をし、創造的に結論を導き、文章にまとめ、吟味し、公開の場で発表します。したがって、本学の学生は、新しい知をつくり出す科学的方法を身につけて卒業するのです。世の中には論文らしき物を書き、それなりに人気を集めて例は少なくないのですが、そういう素人芸ではなく、科学的方法をきちんと学ばれたのですから、皆さまは、卒論をどのように仕上げたかをしっかり思い出していただければ、ご自分で、正しい方法で、新しい課題をみつけ、それを解決していくことがこれからもできるのです。ですから、自信をもって社会でご活躍いただけます。

このような大学で、上のような教育をうけて、ご卒業になるのです。皆様本当におめでとうございます。また、幼いころから本日の卒業生を大事にお育ていただいたご家族や関係者の皆様、重ねてここで、こころからお祝い申し上げます。

さて、今日ご卒業なさる皆様への饒の言葉として、第一に卒業後もしっかりと勉学に努め、技能の向上に励むこと、第二に、皆さまの住む土地、働く組織、接する人々の良い点を見つける努力をすることの二つです。

第一、勉学こそ力です。百人一首にありますから、皆さまは、伊勢大輔の「いにしへの

奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」という歌はよくご存じでしょう。平安王朝華やかなころ、奈良の興福寺から見事な八重桜が京都の御殿にとどけられます。その桜の取り次ぎ役は毎年中宮彰子のお局の紫式部がつとめていました。しかし、ある年、伊勢大輔が同じ局に出仕してきました。この方は伊勢神宮の神官のお嬢様で、この家は歌詠みの家です。そこで、紫式部は、八重桜の先導役を伊勢大輔に任せたのです。新入社員のいわば大抜擢です。

さて、当日です。八重桜を興福寺が届けてきました。その僧侶を伊勢大輔が先導してきますと、天皇皇后は御簾の内におられるのでしょうか。その前に、藤原道長がおられます。そこまでまいりますと、道長がさあと言います。そうなのです。献上を取り次ぐにあたって歌を詠みなさいということなのです。紫式部は歌が必要ですよとは教えてはくれなかったのです。和歌の家のお嬢様としては、いい歌を詠んでみせなければなりません。大変だわと思ったでしょうが、「いにしへの奈良の」と始めますと、きれいに続けました。

即興の歌ですが、「いにしへの奈良の都」で七、「八重桜」で八、「けふ九重」で九で、七・八・九と登り調子で、平安朝がめでたく栄えていくことを読み込んでもいるのです。居並んでいた公達のやんやの賞賛を集めました。清少納言もいたことでしょう。見事に宮中にデビューをかざったのです。

とっさのときに、こういう見事な働きができますのは、日頃の勉強、技能の研鑽の成果です。皆さまも桜も見れば、この話を思い出して、実力を蓄えてください。突然その力が試されるときが人生で3回は来るとよく言われます。このときを捕まえないと幸福の神様はとおり過ぎていきます。チャンスは突然きます。どうかしっかり励んでください。日頃の勉強・研鑽こそ力です。

餞の言葉の第二ですが、皆様、幸せに生きていくには、皆様が、住む土地、働く組織、接する人に暖かく受け入れられることが大事ですが、それには、それらのいい点、すばらしい点を見つけることが重要だと私は考えています。ある土地に住めばそのすばらしい点を地元の人以上に見つけるのです、接する人々について、その人のいい点を見つけることです。そうすれば、土地の人は、接する人は、こちらを受入れ、好きになってくれるでしょう。嫌な点、変だなと思うことがあれば、せめて数ヶ月は、なぜ、彼ら彼女らがそうしているのかを観察してみてください。その土地では、あるいはその組織ではそうするのが合理的であることがわかってくることが多いものです。皆様方は、いい大学で、優れた先生から最新の理論、最新の技能を学んだのですから、相手のやり方は古いとか、劣っているとか思ってしまうかもしれませんが、そのときは、いきなり批判せず、まず数ヶ月は観察してください。そこでは、そうしたやり方が当面は合理的であることが多いのです。そのことがわかる前にいきなり発言すると反発を買いますが、わかってからですと好い関係で話しあっていけることでしょう。まず、相手を理解し、その良い点を見つけることが私の皆様へ贈る言葉のふたつめのものです。

社会は皆様の活躍を待っています。ご卒業おめでとうございます。

平成25年3月21日

県立広島大学 学長 赤岡 功